



鈴木俊之氏に聞く

## 体力の続く限り走る

### 提案好きな上司との出会い

ビジネスの経営に弁理士がどう関わっていいのか、また関わっていくべきか。鈴木俊之弁理士は、そのことをずっと考え、走り続けてきた。既存の考え方に囚われることなく柔軟に、常に時代の一步先を見据えながら。

「エンジニアをやって、特許を目指して企業の知財部へ移って、そこで弁理士資格を取って、大事務所に行き独立というのが出世コースみたいな言われ方を昔は結構されていたんです。自分のキャリアを振り返ると、多くの弁理士とは少し違った路を歩んできたかも知れませんが、それはその時々で何が自分のキャリアに必要なかを考え、行動してきた結果なんです。結果的にその『出世コース』からは外れた経歴になってしまいましたね。」と笑う。

氏は、最初、医療機器メーカーにエンジニアとして就職した。昔風の弁理士出世コースなら、出発点にあたる。そこで最初に配属された部署の上司は「特許マニア」の発明提案好きな人だった。月1件、自分で提案書を書くことをノルマとしていた。そんな上司から、「鈴木君、君も書きたまえ」と言われ、提案書を書いているうちに、だんだんとおもしろく感じるようになっていった。と同時に、自分がエンジニアであることに、やり切れなさというか、割り切れなさを感じていた。そんなとき、上司から、弁理士という職業を紹介された。弁理士になるのは難しいとは言われたが、やってみたいと思い、一念発起の上、会社を辞め、特許事務所に入所した。昭和60年のことである。

しかし、最初の2年間は、新しい仕事を覚えるのに

精一杯で、勉強どころではなかった。2年たち、やっと仕事ができるようになったある日、先輩弁理士から、将来のことを尋ねられ、ここでやらなければと本腰を入れて勉強を始めた。「半端な勉強量じゃなかった」と氏は振り返る。「年末年始、全部勉強している。ゴールデンウィークも勉強している。2年目に答案練習会があるじゃないですか。あのときなんか、1週間ぐらい布団に入らなかったことがある。その辺にごろ寝して、2、3時間すると目が覚めて、また勉強してということをして、本当にぼろぼろになったんです。」

それも独身だからできたことだと言う。もっとも、結婚した今も、寝るのは夜中の3時ごろのため、奥さんに申しわけない生活が続いている。

特許事務所入所から4年、平成元年に弁理士試験に合格した。

### 大学法学部で学ぶ

弁理士になったときは、これで一人前になったという感慨とともに、それまで自分で関わってきた明細書の質に疑問が生じ始めた。

「特許事務所は、1件書いてナンボという世界です。それまでは売り上げをどうするというのが結構メインだったんですけども、それよりは、クライアントの満足度というか、明細書の質の良さの方に興味をシフトしていったんですね。弁理士試験に受かったところで、180度考え方が変わったんだと思うんですよ。」

また、外国案件の仕事をするようになるなど、仕事の範囲が広がったこともあり、新しい世界に興味を持

つようになり、夜間の大学法学部に通い出した。

十数年前の当時は、理工系のバックグラウンドを持つ弁理士が大学に夜間通うことは珍しかった。氏は、その先駆的存在とも言える。

「やっぱり勉強の勢いがついちゃって、自分がわからないことがあるのが、何となく嫌になったんです」

初めての法学部におけるゼミ学習は、大学時代に経験した理工学部でのゼミ学習とは全く違い、おもしろい経験をしたと振り返る。

「私が所属したゼミでは、週1回、研究発表があるんです。その準備が半端じゃなくて、空き時間をずっと図書館で過ごしたりしていました。いわゆる『判例時報』『判例タイムス』、ああいうのを参照したり、本を抜き書きしてあったり、全然違った作業でしたね。でも、結構いい勉強になったので、それはそれでよかったと思います。その場で必要と思う知識を、どんどん補充しているという感じでしたので。」

当初、氏は、日本の司法試験、あるいはアメリカのロースクール進学及びパーイグザムを考えていたが、そこを思い切る前に、企業に行きたくなった。

### 特許事務所からゲーム会社へ

「特許事務所にいると、企業の発明者とコンタクトするわけです。それは発明報告書という書類を間に置いて、対話することになりますね。そのうちにもっと源流管理というか、もっと遡って、発明が生まれるところをどうサポートしようかというところが気になってきたんです。それには、やっぱり企業に入らないとできないと考え、それで一念発起して転職を考えました。」

と、氏は、事務所から企業へ活動の場を移した動機を語る。

その後、氏は、あるゲーム会社と出会った。当時のそのゲーム会社は、既に東証一部上場を果たしていたが、まだまだベンチャーの気風が色濃く、自由な雰囲気満ちていた。もともとゲームが好きだったこともあったが、勢いのある会社であること、そして何より、知財部の歴史が浅く、自分で立ち上げるというおもしろさを感じ、前述の弁理士の「出世コース」から外れる不安などはなく、9年前にゲーム会社へと移った。

ゲーム会社での仕事は、苦労はあったものの満足いくものだった。アイデアが生まれようとしていると

ころを見つけ、それをどう出願に持っていけるかというプロセスを全部踏めたと言う。

「ある程度大手企業の仕事をやっている事務所の場合、発明報告書はきちんとできています。これにプラスアルファをどうするかが事務所の仕事のウリになります。そうではなくて、ほとんどゼロベースの状態、発明のタネを出願に持っていくまでの業務の幅は大きい。ここをどうやるかで、発明の価値が大きく変わります。このある種のスリル感を、事務所にいると、なかなか味わえなかったかもしれません。」

### ゲーム会社からソニーへ

ゲーム会社に勤めて6年ほどした時、友人から、「ソニーに来ないか？」と誘われた。

「大企業って、それなりの伝統を持って、きちんとした特許管理もしている。そういった知識も持つておくべきだろうと思ったのと、自分の持っている知識を、大企業でどれぐらい生かせるだろうという気持ちが出てきたんです。」

前の会社でも大きな不満はありませんでした。ただ、大企業の知財部は、どうなっているんだろうという興味がありました。」



3年前の当時においても、他の会社は、やはりまだ中途入社の壁は厚かった。対して、ソニーは、必要なときに必要な人材をリクルートしてくるという伝統がある。会社全体で見ると、中途入社の社員が比較的多い。氏は、「ソニーだったら、中途入社者も多いし、活気のある企業なのでいいのではないか」と思った。

ソニーに移ってからも、仕事の対象は、今までのコンピューター系から、ネットワーク系に変わった程度で、本質的には、それほど変わりはない。ソフトウェア関連発明の仕事を、今もしているという状態である。

氏に、企業勤務と、特許事務所との違いを尋ねてみると、

「特許事務所の場合は、強迫観念みたいなのが結構あると思うんですよ。明日、仕事が来なかったらどうしようと。でも、会社にいると、大型タンカーの上に乗ったように、非常に楽なんですね。そういう意

味で、集中して自分のやりたいことをやっていけるということはあると思います。

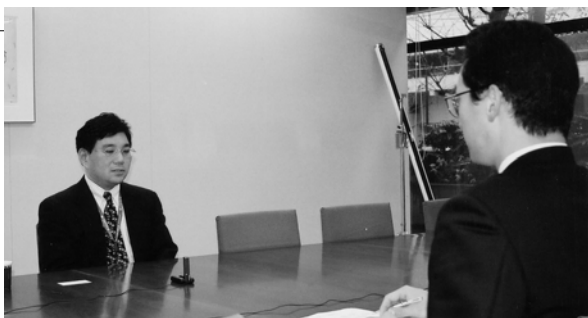
あと、規模が大きいので、大企業にいと分担制なんです。そういう意味で、1つのところを突き詰められる分、楽なんですよ。仕事の時間には、事務所にいても会社にいても、実は大して変わらないですけども、精神的な安定感というか、自分の好きなことを集中してやっていられるということの満足感は大きいですよ。

ただ、企業というのは、きちんと組織があるので、何かを決定しようとするとき、他の会社より身軽だと思えますが、手続きが必要ですね。身軽さという点では、やっぱり事務所の方が身軽だと思えます。自分がやりたいと思って手を挙げて、どんどん自分でやっていける場所は、事務所にあると思うんです。」

現在、氏は、出願の仕事から、企画・戦略的な仕事に比重を移しつつある。氏の説明によると、企画・戦略的な業務とは、特許事務所との窓口になり、こういうふうな仕事をしようとかを決める業務、どういふ分野の出願を重点的にやるかとか、法改正の動向等を見て、今後、企業全体の知財戦略を立案する業務などを言う。

「個人的な希望としては、なるべく、企画・戦略的なところをどんどんやっていきたいなという気があります。

理由は自分の興味が徐々に戦略的な方向に移ったことにあります。どこの企業でも、今までは出願件数を重視している傾向が強いと思うんです。それじゃいけないと『ビジネス IPR』という NPO の中で、いろいろと勉強しているうちに考え始めてきて、では実際、自分でどう実践するかということを考え始めたときに、戦略業務をやりたいと思い始めたんです。」



左 鈴木俊之氏, 右 パテント編集委員 中野圭二

## 「ビジネス IPR」との出会い

氏に、戦略的な仕事をやりたいと思わせた NPO 「ビジネス IPR」。それとの出会いは、同団体を率いる柴田・伊原両氏が著した『ビジネスモデル特許戦略』という本だった。これを読み、2人はどういう人なのだろう？ と興味を持っていたところ、友人に紹介されると言われ、赤坂の飲み屋に連れて行かれた。そこで伊原氏と会い、話しているうちに、「ビジネス IPR」の会員には、当時、会計士や学生など、知財職ではない人が結構多いことがわかり、伊原氏より、「ぜひアドバイスを」と、勉強会に誘われた。2ヵ月に1度の、その勉強会に出ているうちに、「だんだんはまっていった」と言う。

「知的財産部自体は、スペシャリストであるせいか、エンジニア以外の他業種のの人との交流は、そんなにないんです。日本知的財産協会という共通の団体はありますが、これは企業知財部間のつき合いです。『知財』というものを共通言語にして、いろいろな人が集まってくる場というのは、今までなかなかなかったんですよ。それで、『ビジネス IPR』の勉強会に出て、こういう知財の見方もあるのかと。世の中の流れとして、こうなっているんじゃないかと。でも、自分の企業に戻ると、考え方が違う面もある気がするんですね。そこで、世の中はこんな考え方をする人もいるんだよというところを、うまく企業にフィードバックできるといいなと思っているうちに、だんだんはまっていったわけです。こうあってほしいという希望や、理想が見えてきたんです。」

約1年前から、氏は、同団体で、戦略知財分科会を立ち上げ、同分科会代表として積極的に活動している。週に1回程度、平日の夜にメンバーで会ったり、メールのやり取りをしているとのこと。また、土曜日でも会合があることも多く、仕事との二足のわらじで、多忙な毎日過ごしている。

そんなに忙しいにもかかわらず、1年半前から、氏は、毎週土曜日、ゴスペル教室に通っている。もともと歌が好きだったこともあり、女性の多い中、数少ない男性ボーカリストとしても活躍し、教室の母体となっているプロ団体の公演の一環として、クリスマスコンサートに出たり、さらには、「紅白歌合戦」で、和田アキ子氏のバックコーラスの一員も務めた。そう、

氏は、紅白初出場弁理士でもあったのだ！

「(「紅白」のビデオを見て) 男性で眼鏡をかけているのは1人だけだったんです。だから、これは俺だと思っ。ほんとうに豆粒のように小さかったですね。」

と言いつつも、嬉しそうに笑っていた。

### 体力が続く限り走る

氏は、現在、MOT (マネージメント・オブ・テクノロジー：技術経営) に興味を抱いている。

「いわゆる特許屋というのは、技術の知識はありますけれど、マネージメントに関する知識や経営に関する知識がまだ足りないと思うんです。企業にいた場合、そういうマネージメントの知識、経営の知識がないと、例えば研究所とか、経営陣に対して、うまく自分の言葉を伝え切れない部分があるんですね。彼らは彼らなりの言葉を持っているわけです。そこをアタックするために、自分自身が、そういうところの知識的な武装をしていかないと、どうしても太刀打ちできないので、どう打開するかが必要になってきます。そのために、前にもやったように必要な知識を仕入れるために、MOTの大学院に行こうかと思ったんです。」

また、40歳を越えた氏は、今まで自分を育ててもらった社会に恩返ししたいと、最近、どうやって社会に貢献できるかを考えている。幕末の激動期に輝いた坂本龍馬に憧れる氏は、彼が何であれだけの偉業を成し遂げることができたのかと思うと、自分も何かやらなければという思いに駆られている。

氏は、ここまで語ると、自分の経歴を振り返った。

「自分の経歴というのは、かなり変わっているというか、ころころ変わっているんですが、一貫して考えていることは、自分のやりたいことがあって、それに向かって、どうしたらいいかということはずっと考えてきたわけです。その結果、今までの経歴があると思います。」

そのような氏の経歴を踏まえ、若手弁理士へのアドバイスをいただいた。

「弁理士というのは、確かに、産業財産権法のスペシャリストではあるんですけども、それでずっと安定的に飯を食える時代は、もう終わったのではないかという気がするんです。」

「今、弁理士に合格されて、次に何をやるかと考えている方は結構いると思うんですけども、弁理士になったということは1つの入り口ですし、弁理士プラスアルファが何かというところを見ていく必要があると思うんですね。自分の場合は、それが、今は経営がわかる弁理士ということです。」

「あとは、弁理士以外の方と、どれだけおつき合いができるかが、すごく大事だと思うんですね。なるべく外に出て、いろいろな知識を吸収すると、必ず世の中の流れというのがわかってくると思うんです。そうすると、自分の行かなきゃいけない道が見えてくるんだろうと思うんです。」

MOT を学ぶべく、氏は今、社会人大学院に行くかどうか悩んでいる。これ以上忙しくなると、本当に自分の生活がどうなるか心配だと。そこで氏に、そのバイタリティーはどこから出ているのかと聞くと、氏も、自分でもわからないと。ただ、「とにかく走り続けていると、走っているのが気にならない。体力の続く限り走る。どこまで行くかはわからないけれど、走る。」という言葉が印象的だった。

食べ過ぎない、できるだけ野菜をとるなど、食事には気をつけている氏も、最近運動不足で困っているらしい。リフレッシュのためにも、体を動かす時間を何とかひねり出したいとのことだった。

(インタビュー終了後、鈴木氏は芝浦工業大学大学院に合格され、2003年4月から同大学 MOT プログラム一期生として、企業勤務と大学院生としての学習・研究とを両立されている。)

(取材・構成 パテント編集委員 片岡忠彦, 中野圭二)